

## 日常生活と聖書

講座の方法 対面式

講師 シスター岩井 慶子（聖心会）

受講料 9,000 円

日程 水曜日 10：30～11：30

5月15日 6月12日 7月17日  
10月16日 11月13日 12月18日  
1月15日 2月12日 3月12日

聖書学の勉強ではなく、講座名の通り、3人の担当者が、日常生活の中でふと気づいたこと、励まされたこと、安心したことなど主観的に  
お伝えする気軽な講座です。

参加の皆様の自由な反応やご意見もお互いの理解を広げます。正解と  
いうのはなく、また発言しない自由も十分あります。

聖書の使用箇所は担当者がそのころの日常生活から考えて決めてお知  
らせしますが、聖書は用意してありますので、お持ちでなくても大丈夫  
です。内容に継続性はないので、どの段階での参加も可能です。



## キリスト教への招きⅨ

講座の方法 対面式

講師 宮越 俊光（カトリック中央協議会）

受講料 15,000 円

日程 土曜日 14：00～15：30

- 第1回 5月25日 「信条」とは
- 第2回 6月22日 わたしは父である神を信じます①
- 第3回 7月27日 わたしは父である神を信じます②
- 第4回 9月 7日 わたしは父である神を信じます③
- 第5回 10月 5日 わたしは神のひとり子イエス・キリストを信じます①
- 第6回 10月19日 わたしは神のひとり子イエス・キリストを信じます②
- 第7回 11月16日 わたしは神のひとり子イエス・キリストを信じます③
- 第8回 1月11日 わたしは聖霊を信じます①
- 第9回 2月 8日 わたしは聖霊を信じます②
- 第10回 3月 8日 まとめ「アーメン」

※講師の都合により日程が変更になる場合があります

第9期となる2024年度は、「信条」に基づいてキリスト教について学びます。「信条」とは、信者がともに宣言することができるよう、信仰の本質的な内容を簡潔にまとめた定式文です。父と子と聖霊である神への信仰を告白するかたちをとり、初期キリスト教の時代からさまざまなものが作られました。なかでも、4世紀に成立した「ニケア・コンスタンチノーブル信条」と呼ばれるものは、今日に至るまで、東方教会と西方教会の信仰の共通の礎となっています。今期はこの信条に基づいて解説していきます。

この講座では、カトリック教会の立場から、信者ではない方にもできるだけ分かりやすくお話しいたします。これまでの講座を受講していない方も歓迎します。

## 『大和物語』を読む

講座の方法 対面式

講師 山口 佳紀（聖心女子大学 名誉教授）

受講料 15,000 円

日程 金曜日 10：30～12：00

- 第1回 4月26日 『大和物語』を読むために（第六四段「春霞」）  
 第2回 5月10日 第一三段「泣く泣くしのぶ」～第一五段「夜の白玉」  
 第3回 5月24日 第二三段「山水の音」・第二四段「君松山」  
 第4回 6月 7日 第二七段「なほ憂き山」・第二八段「霧の中」  
 第5回 6月21日 第三〇段「ふけゐの浦」～第三二段「武蔵野の草」  
 第6回 7月 5日 第四五段「心の闇」～第四七段「奥山のもみぢ」  
 第7回 7月19日 第一二一段「笛竹」～第一二三段「草葉の露」  
 第8回 9月 6日 第一三七段「志賀山の秋」・第一三八段「沼の下草」  
 第9回 9月20日 第一四八段「蘆刈」（上）  
 第10回 9月27日 第一四八段「蘆刈」（下）

『大和物語』は、『伊勢物語』と並び称される歌物語の一つであり、平安時代の貴族社会で語られていた恋愛譚や古伝説などを紹介する作品です。我々は、これを読むことによって、平安貴族の興味が何に注がれていたか、また彼らの築いた文化がどのようなものであったかを、如実に知ることができます。ただし、この作品は有名である割に注釈書が少なく、内容が十分には理解できていないのが現状です。

この講座では、その各章段を丁寧に読み解きながら、表現の真意を突き止め、文章の魅力を楽しみたいと思います。

## いまのアートの世界をのぞいてみよう

講座の方法 対面式

講師 家村 珠代 (多摩美術大学 教授)

受講料 3,000 円

日程 木曜日 10:00 ~ 11:30

### ① 5月16日 コロナ禍の展覧会



2020年に開催した『金氏徹平のグッドベンチレーション』。グッドベンチレーションとは、良い換気という意味です。コロナ禍のはじまりと同時に企画がスタートしました。京都在住の作家・金氏徹平と東京の多摩美術大学が、Zoomのやりとりで、どのように展覧会の開催までこぎつけたのか。またコロナ禍においても展覧会をおこなった意義を考えます。

### ② 5月30日 自然光だけの展覧会



2022年『中村竜治 展示室を展示』、2023年『空間に、自然光だけで、日高理恵子の絵画を置く』を開催しました。建築家の中村竜治、画家の日高理恵子と、人工光を使用せず、自然光だけによる展示の可能性に挑みました。

「現代美術」は難しそう。きっと分からない。

でも、「同時代の美術」、「いまのアートの世界」、だったらどうでしょう？

「分かる」とか「分からない」は脇において、とにかく、展覧会に足を運び、作品を体験することから現代美術に親しんでみれば、こんなに楽しいものはありません。なにしろ、いま生きているアートなのですから。

コロナ禍から中断しておりましたこの講座ですが、久し振りに開講いたします。

新型コロナウイルスは、私たちの日常生活を一変させました。多くのアーティストは、なぜ作品をつくるのかという根源的な問いから、自らの創作に向かいなおしました。美術館もまた、新聞社主催による大型企画展での来館者大量動員に頼らぬ運営や展覧会企画が求められています。

こうした状況下、美術館は、館の所蔵品を活用した展覧会の開催やホームページ上での展開をも試みはじめました。そして美術大学もまた、アーティストとともに新たな展覧会のあり方の模索をおこなっています。

私が指導する多摩美術大学での展覧会の事例から、「いまの」そして「これから先の」アートの世界をのぞいてみましょう。

## 中国陶磁の世界

講座の方法 対面式

講師 今井 敦（東京国立博物館 上席研究員）

受講料 3,000 円

日程 木曜日 13:00～14:30 6月6日 7月4日

英語の china が陶磁器そのものを意味することからもわかる通り、陶磁器は中国を代表する工芸品の一つです。その歴史の長さにおいて、その質の高さにおいて、常に世界の陶磁器をリードする存在であり、中国産の陶磁器は唐時代後期より世界各国で受容され、また各地の窯業にも大きな影響を及ぼしてきました。本講座ではおよそ時代順に、中国陶磁史の流れを概観し、中国陶磁の魅力について解説いたします。

前期は世界に先駆けて釉薬を発明した商時代から、中国陶磁史上の黄金時代ともよばれる宋時代にかけての陶磁器を取り上げます。窯の中で土器を焼成すると、燃料の薪の灰が降りかかり、土に含まれる珪酸分を溶かしてガラス化し、自然釉を生じます。この現象に着目して人工的に釉薬を施したやきものが作り始められるのは、考古学の目覚ましい進展によって、商時代前期、今から3500年前に遡ることが明らかになりました。この灰釉の技術は長い時間をかけて少しずつ進歩し、後漢時代には青磁として成熟したレベルに到達しました。三国から南朝時代にかけて、中国南部では古越磁と呼ばれる古様な青磁が焼かれ、墳墓に副葬されました。一方、中国北部では隋時代には白色の胎土に透명한釉薬を掛けた白磁が完成されます。唐時代には緑、褐色などの色鮮やかな釉薬を掛けつけた唐三彩が作られ、華麗で国際色豊かな当時の貴族文化が偲べれます。

宋時代になると、文人士大夫を支配階層とする文治主義のもとで芸術文化が花開きます。定窯の白磁、耀州窯、汝窯、龍泉窯の青磁、建窯の天目など、南北各地の窯で個性豊かな陶磁器が焼かれ、きびきびとした端整な器形と、滋味豊かな釉薬の色の美しさが極限まで追求されました。作風は洗練をきわめ、宮中の御用品を焼いた官窯の青磁から、民衆の日用の器を量産した磁州窯まで、中国陶磁史上空前の高峰を形作っています。



重要文化財 青磁輪花鉢 官窯 南宋時代 東京国立博物館  
出典：ColBase (<https://colbase.nich.go.jp/>)

# 王朝の美、国風文化への誘い①

## 平安の刀剣と金工

講座の方法 対面式

講師 原田 一敏 (ふくやま美術館 館長)

受講料 3,000 円

日程 水曜日 13:00 ~ 14:30 5月15日 5月29日

### 平安時代の金工

弥生時代に始まる日本の金属工芸は、奈良時代に遣唐使らによって精緻で華麗なデザインの調度品、装身具、仏教用具などがもたらされました。それらは正倉院宝物によってもよく知られていますが、その影響は平安時代の初期まで続きました。しかし中期頃になると器物の形や文様の表現に、やさしさ、軽快さなどが見受けられるようになります。

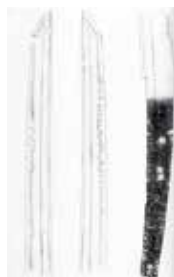
『枕草子』には「うつくしきもの」、今でいうかわいらしいものが語られています。童子のしぐさや着物、鳥の子の歩く姿、ガラスの壺など、そうした小さなものは皆うつくしいと言っています。実は硬いというイメージのある金工にもそうした小さな「うつくしいもの」、雅なデザインや文様を表した作品が、意外かもしれませんが多く残っています。中国の唐時代の影響から和風へと変わっていく表現の変化を作品を通じて具体的に示し、当時の人々の美に対する思いを紹介していきます。



山吹双鳥鏡  
東京国立博物館

### 平安時代の刀剣

反りのつたいいわゆる日本刀は、平安時代中期おおよそ1000年頃に完成をしました。それまでは反りのない真っ直ぐな直刀でした。その最も古い刀工が京の三条の宗近と伯耆国（鳥取県）の安綱です。宗近は能の小鍛冶の主人公で、また安綱は源頼光が大江山の酒吞童子を征伐した太刀の作者として有名です。彼らの活躍した時代は武士が登場した時期であり、その頃から京、備前、九州に刀工の集団が現われるようになります。平安時代の太刀は細身で反りが高く、優美な姿をしたものが多いのが特徴です。太刀はあくまで人を斬る道具ではありますが、鍛えや刃文の美しさを追求したことも確かです。当時の武将の愛刀やエピソードを紹介して、平安時代の刀剣のすばらしさを講義します。また公家が御所での儀式に使用した華麗な飾剣や武士の太刀を収めた外装についても触れ、同時期の金工や漆工など他の工芸品との時代性についてもお話したいと思います。



正恒

# 王朝の美、国風文化への誘い②

## 平安の仏像

講座の方法 対面式

講師 皿井 舞 (学習院大学 教授)

受講料 3,000 円

日程 水曜日 13:00 ~ 14:30 6月12日 6月26日

### 平安時代前期の仏像

8世紀末に、奈良の平城京から長岡京、さらには平安京に遷都するなかで、木材を材料とする一木彫像が隆盛するようになります。木の形状を活かした、深くえぐるような彫りを見せる一木彫像は、その迫力や彫技の闊達さに、目を見張るものがあります。

本講座では平安時代前期を中心に、人々が何を祈り、求めたのか、作品の鑑賞ポイントを紹介しながら、考えてみたいと思います。

### 平安時代後期の仏像

400年近くの長きにわたる平安時代においては、社会が移り変わり、人々の求めに応じてつくられる仏像のかたちも変わっていきます。本講座では、10世紀末以降の、いわゆる王朝文化が栄えた時代に、どのような仏像が理想とされたのか、社会と仏像の関わりを紐解いていきます。



重文 大日如来坐像  
奈良国立博物館



国宝 薬師如来坐像  
奈良国立博物館蔵

# 王朝の美、国風文化への誘い③

## 平安の服飾

講座の方法 対面式

講師 小山 弓弦葉（東京国立博物館 工芸室長）

受講料 3,000円

日程 水曜日 13:00～14:30 5月22日 6月5日

『源氏物語』が紫式部によってつづられたのは、平安時代中期のこととされています。奈良時代まで、日本の宮廷装束は中国に倣う形でしたが、平安時代には、日本の風土と宮廷貴族の生活様式にあった形に整えられるようになりました。いわゆる国風文化が行き渡り、装束に表わされる文様も宋時代に入ってきた唐織物の文様を和様化した有職文様が用いられるようになりました。現在、皇族の方がご即位や新嘗祭などの重要な儀式でお召しになる男性の束帯や女性の唐衣裳などもこの時代に整えられた装束の様式です。

唐衣裳とは俗に十二単と称し、文字通りにとりますと単を十二領重ねる、という意味になります。宮廷で生活する女性たちは、何領も重ねる装束の配色を大切に、その色の合わせ方でその人となりや趣味の良さなどを推し量りました。その様子は『源氏物語』の中にも描かれています。「関屋帖」では、逢坂の関に行く空蝉の一行の牛車からはみ出る装束について「車十ばかりぞ、袖口、ものの色あひ【装束のかさねの色合】なども漏り出でて見えたる、田舎びず、よしありて」と記され、装束をまとう人々の洗練された趣味の良さを装束の色の重ね具合で想像する様子が描かれています。

また「玉鬢帖」では、年の暮に光源氏や紫の上が、それぞれの人に合った装束を選ぶ様子が描かれていますが、その中には「紅梅のいと紋浮きたる葡萄染の御小袿」「浅縹の海賊の織物」「山吹の花の細長」「柳の織物の、よしある唐草を乱れ織れる」「梅の折枝、蝶、鳥、飛びちがひ、唐めいたる白き小袿」「青鈍の織物」など、さまざまな色と文様の装束が描かれ、当時の人々の装いに想いが募ります。

『源氏物語』には、当時の人々がどのような装いをしていたのかが、こまやかに描かれている場面がみられます。その表現を通して、この時代の人々が時と場所、あるいは年齢や身分によって、どのような装いをしていたのかを探ってみましょう。



小袿



## 禁忌の恋はどう語られたか －藤壺の物語を読む（「須磨」巻②）－

講座の方法	オンライン (Zoom)
講師	大津 直子 (同志社女子大学 准教授)
受講料	7,500 円
日程	火曜日 13:00 ~ 14:30

- 9月24日 昨年度までの振り返り、ご質問への回答
- 10月 1日 須磨での暮らしぶり
- 10月 8日 女性たちとの文の遣り取り①
- 10月15日 女性たちとの文の遣り取り②
- 10月22日 朧月夜の動静と憂愁の日々

光源氏とたった五歳しか変わらない継母・藤壺の存在は、光源氏の人生を、あるいは『源氏物語』の正編全体を貫く重要な軸です。

しかしながら、戦前谷崎潤一郎訳『源氏物語』において藤壺の登場箇所が削除されたことが象徴するように、皇統乱脈を描く光源氏と藤壺との恋は時代の流れの中で忌避されることもありました。果たして物語はどのように禁忌の恋を語っているのでしょうか。

本年度は、光源氏の須磨における蟄居の日々を読んでいきます。

講座の中では従来通り、貴族たちの生活世界をイメージしていただけるように画像資料を用います。受講者の皆様が平安朝の世界を心の中に思い描きながら原文を味わってくださるよう努めます。また、途中回からのご参加や講座内容に関するご質問も大歓迎いたします。オンライン講座ですが、双方向のやりとりとなるよう工夫したいと思っております。なお、本年度は講師の都合により開講回数を削減いたしますことをご了承ください。